農作業体験学習受け入れ地域における住民意識と地域活性化の課題
Resident' Views and Subject of Revitalization in Educational Farming Area

○石田憲治＊、田村孝浩＊＊、嶺田拓也＊、廣瀬裕一＊
ISHIDA Kenji*, TAMURA Takahiro**, MINETA Takuya* and HIROSE Yuichi*

1．はじめに

国民の価値観の多様化や都市住民のふるさと志向の高まりを背景に、農村の役割への期待は拡大しつつある。また、農村地域においても、さまざまな工夫を活かしたグリーンツーリズムの推進が各地で模索されている。この研究では、都市農村交流の一環として都市周辺地域の中学生による農作業体験学習の受け入れを行うことにより地域活性化に取り組んでいる地域を取りあげ、アンケートにもとづく住民意識の分析を通じて、農村地域にとって農作業体験学習を受け入れやすい条件を明らかにするとともに、地域活性化の課題を考察する。

2．対象地域の概況と調査方法

対象地域として選定した宮城県Ｋ町は、2003 年 4 月に隣接３町が合併して誕生した、総面積約 46,000ha、人口約 28,000 人の農村地域の自治体である。農林業が基幹産業であり、約１／３の世帯が農家であるが、専業農家は 7.2 ％にとどまり、10.8 ％が自給的農家、65.9 ％が第２種兼業農家である。

県都仙台市からの距離や地域資源にも恵まれていることから、農産物直売所や農家民宿、農家レストランなどの取り組みも来訪者の関心を集めており、旧 O 町時代に約 50 名の会員で設立されたグリーンツーリズム推進協議会が窓口となって、数年前から仙台市等の中学生の農作業体験学習などを積極的に受け入れている。

調査は、2005 年５月に実施された２校の農作業体験学習受け入れを踏まえて、受け入れ農家への聞き取り調査を行い、農作業体験内容の整理等にもとづいて設問項目を作成し、町内世帯悉皆アンケートとして 2005 年 11 月末～ 12 月中旬に実施した。7,868 世帯に世帯主用と家族用の調査票をそれぞれ各１部ずつ配布し、世帯主から 4,033 票（有効回答率：51.3 ％）、同居家族から 3,672 票（同：46.7 ％）の回答を得た。

3．調査結果とその考察

⑴ 生徒受け入れの動機や契機

農家が生徒の受け入れを開始した動機や契機では、「グリーンツーリズム活動への興味」のほか、「『農業の楽しさ、大変さ』や『農家の暮らし』を知って欲しい」という項目に回答が集中した。また、次いで「子どもたちの考え方を聞いてみたい」、「子どもの反応が素直だから」など生徒との関わりを重視した項目が多く指摘された（図１）。

これらのことから、農家が子どもたちに農業や農村の生活に関して積極的に情報発信し、子どもたちとの関わりを大切にしたいと考えている様子をうかがい知ることができる。

＊農村工学研究所　National Institute for Rural Engineering　　＊＊宮城大学　Miyagi University

キーワード：都市農村交流、農作業体験学習、グリーンツーリズム

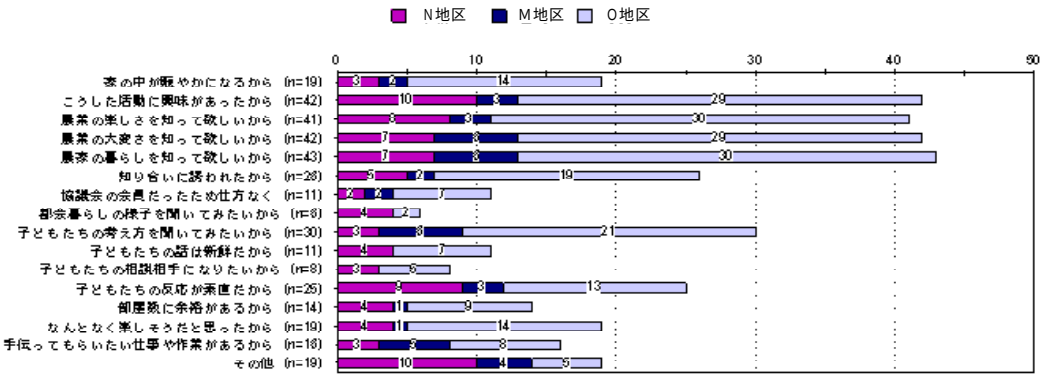

図１　　農家の受け入れ動機や契機

Fig. 1　Motivations and Opportunities for Participating in GT activities of Farmers

(2) 受け入れの継続と中断

受け入れ農家 116 世帯の回答結果をみると、「特別に生徒が楽しめるような作業を用意した」農家は、毎年受け入れを継続している農家では 15.4 %にとどまったが、受け入れを中断している農家では 35.7 %に上った。この結果から、継続的な受け入れには「生徒を特別な客扱いしない普段通りの作業」の実施が重要であることが示唆された。

さらに、農家が受け入れを中断したり、受け入れに躊躇する理由を尋ねた設問では、受け入れそのものに否定的な回答は少なく、具体的な作業や体験場所のないことや広報不足等に起因すると考えられる理由が卓越しており、地域内での連携や広報と緊急時の体制整備による受け入れ農家の参加拡大の可能性を指摘できる（表１）。

表１　受け入れの中断や受け入れない理由

Table1　Reasons why Farmers Are Hesitative

受け入れ中断や未実施の理由	指摘率%
体験させるような場所を持っていないから	45.3
手伝ってもらうような仕事がないから	38.6
こうした活動があることを知らなかったから	35.7
案内や依頼がなかったから	31.7
事故などがあった時に責任が取れないから	26.9
他人を家に泊めるのは抵抗があるから	21.2
部屋数が少ないから	20.3

注:複数回答、n＝6，037

(3) 受け入れ条件と今後の課題

市街地で非農家の多い地区を除くと、約１／２の世帯が生徒の受け入れに協力的であることがわかる（図２）。農作業体験の場を持たない非農家が宿泊を提供して、日帰り農作業を指導する農家と連携する等の地域内・地域間の連携やその体制づくりが期待される。

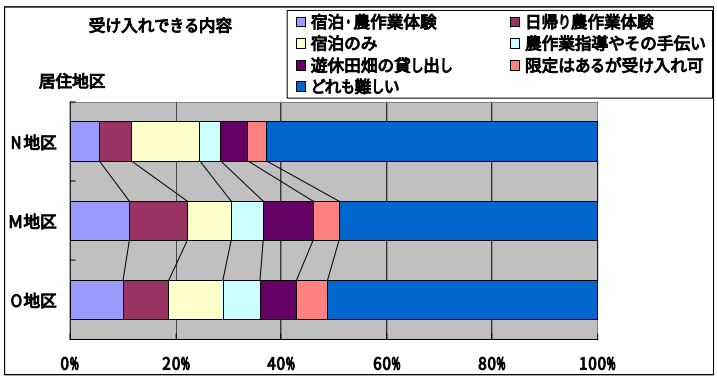

図２　生徒受け入れの制約条件や協力形態

Fig.2　Types of Participating in GT Activities of Residents

謝辞：この研究は、2005 年度独立行政法人農業工学研究所交付金プロ「ソフト機能」研究の一環として実施したものである。関係者ならびにアンケートにご協力いただいたＫ町の皆様に深謝する。